

令和4年度 静岡県立大学短期大学部

学校推薦型選抜・社会人特別選抜 試験問題

下の文章を読み、次の問に答えなさい。

問1 下線部について、「本当の自分」とはどのようなものか、そして、筆者がそれを「神話」と呼ぶのはなぜか、50字以上100字以内で説明しなさい。

問2 「本当の自分」についての筆者の主張にあなたは賛成か反対か、理由を挙げて500字以上700字以内で述べなさい。

<記述上の留意点>

- ① 解答は横書きとすること。
- ② 句読点および改行による空白も文字数に含めること。
- ③ 問1の解答は1行目から、問2の解答は5行目から記述すること。

日本語の「個人」とは、英語の^{インディヴィジュアル}individualの翻訳で、一般に広まったのは明治になってからである。しばらくは「一個人」と訳されていた。

individualは、in + dividualという構成で、divide（分ける）という動詞に由来するdividualに、否定の接頭辞inがついた単語である。individualの語源は、直訳するなら「**不可分**」、つまり、「**(もうこれ以上) 分けられない**」という意味であり、それが今日の「個人」という意味になるのは、ようやく近代に入ってからのことだった。

日本人は、この概念を西洋から輸入したわけだが、「個人」という日本語からは、「分けられない」という原義を感じ取りにくい。そんなふうに考えてみたことがなかったという人が大半だろう。しかし、私たち「個人」の抱える様々な問題は、実は、この見えなくなっている語源にこそ隠されている。

個人は、分けられない。これは、人間の身体を考えてみるならば、当たり前の話だ。一人の人間の体は、殺してバラバラにしない限り、分けることができない。そのたった一つの体——実体として存在している個人に、「森林太郎」だとか、「川端康成」といった名前がそれぞれついている。

では、私たちの人格はどうだろう？ 体と同じように、分けることができない、唯一のものなのだろうか？ 当然じゃないか！と、これまでは考えられてきた。私は私、あなたはあなただ。体と同じように、その境界ははっきりしていて、色々なことを感じたり、考えたりしている自分は一つだ、と。

しかし、本当にそうだろうか？ それは、私たちの実感と合致しているだろうか？ 頭をまっさらにして、人間関係を観察していると、どうもそうじゃないんじゃないかという疑念が湧いてくる。

たとえば、会社で仕事をしているときと、家族と一緒にいるとき、私たちは同じ自分だろうか？ あ
るいは、高校時代の友人と久しぶりに飲みに行ったり、恋人と二人きりでイチャついたりしているとき、
私たちの口調や表情、態度は、随分と違っているのではないか。

それはそうだ。人間には、色んな顔があるのだから。そう言われるかもしれない。

このことと、人格はただ一つ、という考え方とは、矛盾しているだろうか？ 恐らく多くの人は、矛
盾しないと答えるだろう。人間は確かに、場の空気を読んで、表面的には色んな「仮面」をかぶり、「キ
ャラ」を演じ、「ベルソナ」を使い分けている。けれども、その核となる「**本当の自分**」、つまり自我は
一つだ。そこにこそ、一人の人間の本質があり、主体性があり、価値がある。……

こうした人間観は、非常に強固なものである。私たちは、ウラ・オモテがある人間を嫌うし、本音と
建前を使い分けるのを日本人の悪習だと考える。八方美人というのは軽薄な人間の代表で、何よりも、
「ありのままの自分」でいることこそが理想とされている。

どこに行っても誰と会ってもオレはオレ、ワタシはワタシ。それこそが、誠実な人間の生き方だ。――
しかし、もう一度、実感と照らし合わせてほしい。そんなことは、果たして可能なのだろうか？ こち
らはそれでいいかもしれない。しかし、相手をさせられる方は、たまったものではない。面倒臭いヤツ
と、^{へきま}辟易されるのがオチだ。

人間には、一人一人、多様な個性がある。にも^{かかわ}拘らず、相手がどんな人であろうと受け容れられる
人格というのは、どういうものだろう？ 聖人君子のような理想的な人格なのか、それとも、どんな消
費者にもマッチする大量生産品のように、没个性的で、当たり障りのない人格なのか？ どちらでもな
く、「オレはオレで通ってる」という人がいれば、周りが非常に寛大で、忍耐強く彼を受け容れている
だけなのではないだろうか？

私はだから、人間は結局、他人の顔色を窺いながら、「本当の自分」と「表面的な自分」とを使い分
けて生きていくしかない、と言いたいのではない。**他者と共に生きるということは、無理強いされた「ニ
セモノの自分」を生きる、ということではない。**それはあまりに寂しい考え方だ。

すべての間違いの元は、唯一無二の「本当の自分」という神話である。

そこで、こう考えてみよう。**たった一つの「本当の自分」など存在しない。**裏返して言うならば、**対
人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。**

(引用：平野啓一郎 『私とは何か——「個人」から「分人」へ』 3～7頁 2012年 講談社 原文
縦書き 太字は原文のまま)